



【「戦後80年 語り続ける写真たち～公文書館一帯は陸軍駐屯地だった～」】

その4 戦没兵士の合同葬

日中戦争から太平洋戦争にかけて、亡くなった兵士・民間人は約310万人と言われていています。この中には、大分駅から戦地へ行き、戦死という無言の帰還をした兵士も含まれています。

昭和12（1937）年10月31日、陸軍歩兵第47連隊駐屯地で、支那事変戦没者の合同葬が執り行われました。（画像①）

兵士たちが向かって整列するのは、たくさんの幟や葬儀用花輪が左右に立てられた祭壇です。





画像②

積み上げられた遺骨に向かい、大分県 栗屋仙吉知事が弔辞を読んでいるところです。

(画像②)

「弔敬」の額が掲げられた祭壇は、注連縄やさかきで装飾されています。

兵士たちが向きあう祭壇の更に向こうには、入営時と変わらぬ丘陵が見えています。

大切な人を思う心も、今も昔も変わりません。

大切な人を失うことになる戦争がなぜ起こり、続いたのか。

問い続け、考え続けることの大切さも変わっていないと思う終戦から80年の今年です。

資料

『森肇氏旧蔵アルバム 1』

参考資料

・「支那事變と無敵皇軍」大分新聞社 発行 1938年

・「大分聯隊写真集」 国書刊行会 発行 1978年

(大分県立図書館所蔵)

・大分県報 S12 (8)

・大分新聞 S12 (1937) 年10月28日朝刊、10月31日朝・夕刊、11月1日夕刊

(大分県立図書館の新聞画像データベースより)